

平成23年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻

博士論文要旨

- | | |
|---------|--|
| 飯田 和 明 | 小砂丘忠義の綴方教育における基本構造と思想 |
| 戸野塚 厚 子 | スウェーデンの義務教育における「共生」
(Samlevnad) のカリキュラムに関する研究 |
| 小 松 孝太郎 | 数学的探究における
操作的証明の活用の促進に関する研究 |
| 片 平 克 弘 | 粒子理論の教授学習過程の構成と展開に関する
研究 — 構成主義に基づく理科教授の構想と実践 — |

博士論文要旨

小砂丘忠義の綴方教育における基本構造と思想

飯田和明*

Kazuaki IIDA

1. 研究の目的

本研究は、生活綴方教育の始祖と呼ばれる小砂丘忠義（1897～1937）の行った綴方教育の実際を描き、そこに「自己－他者」概念を用いて考察を加えることにより、小砂丘忠義の綴方教育における基本構造と思想を明らかにし、生活綴方教育生成期におけるその仕事の歴史的な意義と、現代につながる教育研究の課題とを示そうとするものである。

日本における独自の教育とされ、その価値を論じられてきた生活綴方教育は、小砂丘等によって戦前期に発行された雑誌『綴方生活』にその生成が代表されると考えられる。しかし、雑誌主幹たる小砂丘忠義の綴方教育に関する研究は未だ十分ではない。特に彼の高知での教師時代に遡り、上京後の『綴方生活』編集者時代を通覧して、現代に至る教育の問題を考察するという包括的視野において捉えた研究は、十分な進展を見せていない。このことは、今日に至る「生活綴方教育」の内実の認識を、一定のバイアスがかかった状態において変位させる原因にもなっていると考えられる。

本研究では、小砂丘忠義の出自（高知時代）からたどってその教育実践と思想形成の過程を確認し、上京後の言動との通覧を図る。そして、その独特な綴方教育を「自己－他者」概念を用いることによって考察する。さらに彼が折々の現実の教育問題に対処する姿を描きながら小砂丘の綴方教育における基本構造を析出し、その教育思想を捉えていく。この作業は戦前の生活綴方教育における「教育の事実」を描くことになるが、それは現代的教育研究の課題に有効に働くと考えられる小砂丘の特異な性質を示すことにつながる。議論は、教育史研究における「1930年代論」という枠組みの中への小砂丘研究の位置付け、生活綴方教育の生

※人文科教育学

成とその変位に関する歴史認識の一部を修正する提起へと展開される。

2. 研究の課題と方法

上記の目的を達するために、先行研究の詳細な検討によって問とすべき事項を特定し、原史料を収集、参照し、先行論が形成された経緯をたどりつつ、教育を動かす構造と思想のレベルにおいて考察する。これらは、次のそれぞれの課題を設けることで議論される。

- ① 小砂丘忠義が行った綴方教育の実際とはどのようなものだったか。
- ② 小砂丘の綴方教育（以下、小砂丘綴方教育）の基底はどのようなところにあったのか。
- ③ 小砂丘綴方教育における「生活重視－表現技術重視」はいかに解釈されるべきか。
- ④ 小砂丘綴方教育が持つ基本構造をどのようなものとして描くことができるか。
- ⑤ 小砂丘綴方教育が胎息している思想とはどのようなものか。
- ⑥ 小砂丘綴方教育が提起する現代的課題とはどのようなものか。

3. 論文の概要

第1章「小砂丘綴方教育の事実」では、小砂丘が当時の教育の場に現実に生起させたもの一「教育の事実」を描き出した。今日における生活綴方教育受容の問題に大きく関わる文章指導の問題に対応するため、従前十分に検討されていなかった子供向け綴方雑誌『鑑賞文選』『綴方読本』を中心的史料とし、特に彼の文章指導について検討した。

検討の結果、小砂丘忠義の文章指導には、その技術、構成、意図という各面において有効な指導がされていることが確認された。それらは「基礎的な学力の保障」を志向し、「作品によって、子供も大人も共に研究する」方向を持って教育を開くという意味で画期的な実践である。そこには彼が「連携」「継続」を重視し、「学校の内と外」とをつなぐ枠組みにおいて教育を考えていたことが見出されるが、これらの「事実」とは異なる今日的受容の様態に鑑み、教育事象の認識の変位に関する課題を捉えることの重要性を指摘をした。

第2章「小砂丘綴方教育の基底」では、小砂丘高知時代研究における問題点を探り、この時期における「変化」の存在を指摘した。1917年師範学校を卒業後、

教職に就いて三年目にその変化は現れ、「綴方の鬼」と言われた上京（1925）後の小砂丘の姿がそこには既に存在していた。変化後の彼は、周囲から危険視、白眼視されながらも驚異的な活動を展開した。

ここには彼の「教育への確信」が存在したが、検討の結果、この小砂丘高知時代における「変化」の意味は、「内から外へ」という認識の獲得であると結論された。そしてこのことは、小砂丘の「自己」に対しての「他者」の出現であったと考えられる。この「自己－他者」を巡っての議論が、小砂丘綴方教育研究の新たな可能性を開く鍵となることを示唆し、同時にそれが彼の綴方教育の基底にあるという認識を示した。

第3章「小砂丘綴方教育における「生活重視－表現技術重視」」では、彼が教育雑誌『綴方生活』を基点として全国を舞台に活躍した1930年代において、いかに教育の現実に対処したかを検討した。先行論によると、綴方指導における「生活重視」から「表現指導重視」への力点の移動を根拠として「小砂丘の転回」を見取る立場があるが、本研究では小砂丘が表現技術指導に傾いていった事情に絡めて、彼の言動に新たな解釈を加えた。

小砂丘は上京後、慎重にはあったが深くプロレタリア教育から影響を受け、その消化の結果として、「表現技術指導重視」と「意欲重視」を綴方教育の進むべき道とした。そこには「社会主義的国家の実現」という「目的」を、「表現技術」という「科学的方法」によって支えるという構図が存在する。さらに、「自己」に対する「他者」の開示が綴方教育の場面にも反映され、「生活重視」の面には「自己を書く」ことが、「表現技術重視」の面には「他者と対峙させること」が要求される事態を確認することができた。

第4章「小砂丘綴方教育の基本構造」では、「自己」「他者」に関する考察、及びその構成を行い、「小砂丘綴方教育の基本構造」を描いた。先行論における、「アナキスト」「近代の自我の確立を願う近代論者」といった「自己」概念に疑義を呈した、「自己と自然の分離」「対自的な認識と交感」（中内敏夫）に関する議論を発展的に検討し、小砂丘における「他者」概念との関連において「自己」の課題を整理した。

検討の結果、小砂丘における「自己」とは、一度明確に「他者」から分離され、「自己」は「他者」を前にして十全に開いていることが確認された。この「他者の受容」に「動く」という事態を取り込み、「新しき自己の意識に生きる」ことを目

指す「小砂丘綴方教育の基本構造」を、〔「自己」と「他者」を一度「分離」する。「自己」は「分離」された「他者」を受容する。「受容」の際、「動く」ことが「自己」の側に生じる。「動く」ことによって、「自己」は「新しい自己」となり、「創造」が生まれる。〕として提示した。

第5章「小砂丘綴方教育の思想」では、小砂丘忠義の綴方教育が内包する思想を考察した。先行論においては、「完人」「土着の思想」「原始子供」といった把握がされているが、これらの概念では小砂丘の教育思想を表すに不十分であると考えられた。

検討の結果、小砂丘の教育思想の中核は、先行論を代表する「原始子供」といった特定の概念というよりは、教育を開く視点として彼の綴方教育に触れる者達に対して発せられた「相対的自立性」というエートスと考えるべきであること、それは教育という仕事に当たるに、その営為を行う自分自身においてドグマに陥ることなく、常に世界に向かって自らを開き、現実に対処することを促す、「眼に見えぬ物へのまなざし」を持たせようとする、いわば教育の認識装置であることを述べた。

第6章「小砂丘綴方教育と現代」では、1930年代における教育の状況と歴史としての描かれ方を概観し、同時代に発行された教育雑誌『綴方生活』、その編集主幹である小砂丘忠義の教育思想が持つ意味を検討した。民主的な動きがファシズムの台頭によって抑圧され、前者が後者に対抗するという二項対立的な枠組みに関する疑義は、先行する1930年代論においての重要な指摘であるが、そこに歴史の「連続－不連続」を絡めて検討を行った。

その結果、小砂丘忠義等による『綴方生活』誌を、この二項対立的な枠組みで捉える史観、具体的には、教育科学研究会と生活綴方運動に連続性を付与する中で、『綴方生活』－『生活学校』－教育科学研究会」という流れとして一括された歴史認識に疑問を呈し、小砂丘の教育思想をそこから切り離して取り出した。そして、1930年代論に生活綴方教育の角度から切り込み、現代の教育を照らす大切な視点を得ることの可能性を指摘した。

終章においては、本研究の成果をまとめ、生活綴方教育成立前史として「自己－他者」論から検討することの有効性を述べた。芦田恵之助、鈴木三重吉という国語教育史における重要な人物による綴方教育の在り方を、この論点から読み直すことが必要と考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題としては、本研究の成果を踏まえ、「戦前・戦中・戦後の通覧」「グローバルバリズムと生活綴方教育」という視点で教育研究を行うことが挙げられる。